

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その8

聖地「コックマルムマザー」

いったん、ホータンの町に帰り、ラグ麺とシシカバブの昼食。時折ラグ麺がポロに変わることはあるが、このメニューが毎日。しかし不思議なことに飽きない。ヌルさんに言わせれば朝昼晩3食ラグ麺ということも日常茶飯とのことである。ここではホータン特産と言われるナツメのジュースを飲んだ。すっきりした甘さでのどごしもよかった。午後は「コックマルムマザー」というこれまた聞いたことのない場所を案内してもらった。ホータン地区イスラム教の巡礼の聖地ということで、何人ものウイグル人がここを



コックマルムマザーからの景観

訪ねていた。川の上にそそり立つ断崖の途中に洞窟があり、そこはイスラム教の修行の道場になっていて、ひたすらコーランを唱える信者の姿があった。その断崖の上には、10Cごろここに布教に訪れたアラビア人宣教師のものとされる墓があったが、羊の剥製が祭壇にいくつも供えられ、チベット仏教のタルチョに似た色とりどりの布がはためくこれまでに経験したことのない形態の墓であった。ユルンカシ河の流れ

を眼下に見、遠く沙漠の彼方には崑崙の嶺々を遠望する素晴らしい景観に圧倒された。町に帰ってからは、久根さんと二人で買い物などをして回ったが、中心部には地下街などもできており、随分様変わりしているのを目の当たりにさせられた。

ヌルさんは友だちのところへ行くというので、夕食は周、秦の二人と久根、大西の4人で屋台へ直行。彼らは明日からの沙漠でのキャンプのために、釣り道具を調達したという。山へは行けなくなったが、沙漠の幕営に釣り、なかなか経験できない経験が明日は待っている。夜、周さんから電話を借りて、日本へ電話し、偵察が想定外の事態で不首尾に終わったことを伝えた。最初は宮本さん、次いで信毎の小松さんへ。こちらでは連日パキスタンやクチャ(庫車)の洪水のニュースが報道されているが、日本ではあまり大きく取り上げられていないらしい。二人からはともに「天災では仕方がない、せめて残りの旅行を楽しんできて下さい。」と言われた。それはその通りなのだが、そう言われると却って辛くなる。

新沙漠公路を横断 1

8月3日 今日沙漠を一路北上横断する。以前は「沙漠公路」と言えば、ニヤ(民豊)からクチャを結ぶ石油の輸送路のことを言っていたが、今回我々が辿るのはユルンカシ河と並行するようにホータンからアラール(阿拉尔)を経由してクチャを繋ぐ「新沙漠公路」(217号線)。「阿拉尔(アラール)」と「和田(ホータン)」をつなぐので阿和沙漠公路と呼ぶらしい。この道は2008年に開通したばかりだそうだ。このルートを最初に横断したのは、1885年のプルジェワルスキーだったが、その後ヘディンが、またスタインがこのホータン河(ユルンカシとカラカシが合流してホータン河となる)の河床をたどった。彼らが沙漠横断にこのルートを選んだ理由は、沙漠を横断してタリ

ム河まで河床がはっきりしている河は、ホータン河が唯一であり、その点で沙漠の羅針盤ともなりうるからだというのだが、今は彼らが探した「マザーターグ」もこの道路のおかげで簡単に行くことができるのだ。最も、僕らは最初からこの道に行くつもりではなかった。というより、この道の存在そのものを知らなかったというのが実際のところだが……。当初僕らは、旧来の「沙漠公路」に行く予定だった。しかし、今年の洪水の影響で、ケリヤからニヤまでの道が壊滅的な状況ということもあり、この新しい道を辿ることになったのだ。

ホータンの町を抜け、ユルンカシ河を渡ると、程なく新沙漠公路の道が西域南道から分岐した。ホータンと言えば「崑崙の玉」。10年前に登った「カシタシ」の「カシ」は「玉」を「タシ」は「石」を表すウイグル語である。実際最奥のリュシュ村（ウイグル語ではカシタシ村）には、玉の原石を買い取る企業もあり、地元のウイグル人はこぞって山で原石を拾い集めていた。ちょっと話は飛ぶが、そのリュシュ村で、当時僕らのポーターを務めてくれたウイグル人をも含む何人かが、最近その会社との間でトラブルを起こし、何人かが玉を不正に売買するなどして、お縄を頂戴したということアイレットさんから聞いた。この地域に入山した最初の登山隊として、金のばらまきや文化の違いから生ずる摩擦などには細心の注意を払ったつもりである。しかし、僕らが通った3年間で、経済的に彼らに恩恵を施したことは間違いない。彼らの犯した罪の原因の一端がもしかすると我々にもあるのかもしれないと思うと辛い気持ちになった。外国人として初めて足を踏み入れるときには、本当に気をつけねばならない。話をもとにもどす。ユルンカシ河はその「崑崙の玉」を運んでくる川であるが、河原ではその玉拾いの一群が一攫千金を夢見て一生懸命に玉を漁っていた。しかし、その探し方が半端じゃない。というのは、数十人でバックホーやブルドーザーを調達して河原をひっくり返してその箇所を隈無く探しているのだ。こうなると、暇人の道楽では済まない。「企業」である。どの程度のアガリがあるのかは不明だが、周さんによれば機材を借りるのもかなりの高額とのこと。これで成り立つ商売なのだろうか？他人事ながら、気になった。

さて、車は沙漠に開かれた道を100kmのスピードでひた走る。クチャまでの道のりはおよそ600km。沿道は次第に緑が少なくなっちはいくが、やはり川沿いということもあって、なんらかの植物が目に入る。「沙漠には水がない、一木一草とてない、無機質の世界」なんていうのは、嘘っぱち。ところどころに水は湧いているし、胡楊が、タマリスクが、ラクダ草が時には薄く、また時には濃く自己主張をしている。過酷な自然条件の中でのこれらの生命力には脱帽だ。そんな沙漠を貫く道を通って驚くべきことは、砂防工事の方法である。おそらくメンテナンスをしなければこの道もいにしへの遺跡同様、程なくして埋まってしまうことだろう。それを防ぐために、公路の沿道の左右は10mから数10mの幅で、規則的に50cm四方くらいの方形に刈り取った茅

を砂に埋めてある。その埋め方には色々なパターンがあるのだが、いずれにせよ600kmの道路の沿道は途切れることなくこの人力によるこの砂防工事が施されていた。沿道の何か所かでは炎天下、この茅を地面に埋め込む作業をしている道班の公務員の姿が散見された。中国に来ると、現代の万里の長城よろしきこの手の人海戦術が目につく。やはりこの広大な国の一番の財産はマンパワーだということを知らされる。



沙漠公路沿いの砂防工事（緑の木は胡楊）